

令和7年度 事業所における自己評価総括表（ドットジュニア 船橋浜町教室（放課後等デイサービス・児童発達支援））

子ども家庭庁が定める「放課後等デイサービスガイドライン」「児童発達支援ガイドライン」に基づいて、さらに強化・充実を図るべき点（事業所の強み）や、課題や改善すべき点を整理・分析しています。この自己評価総括表をもとに、業務・サービスの資質向上や改善をしていくことを目的としています。

<保護者アンケート調査時期：R7/11/17~R7/12/5> <職員アンケート調査及び検討時期：R7/11/17~R7/11/25>

強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
<ul style="list-style-type: none"> <li>個別支援計画や専門支援計画を作成、子ども一人ひとりの特性（ADHD、自閉スペクトラム症等）に合わせ、スモールステップで目標を設定し、達成感を積み重ねる支援が定着している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>言葉だけでは伝わりにくい子どもに対し、ホワイトボードやイラストを用いたスケジュールなど視覚支援を活用し、見通しを持てる環境を整えている。</li> <li>目標達成を本人に実感させるため、スタンプカードでスタンプが溜まると好きな景品がもらえるといった視覚的にも体験的にも成功体験を積み上げられるツールを活用している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>船橋市内の他事業所やボランティア団体、近隣の公園・施設を活用した社会参加プログラムの拡充。</li> <li>学校での個別の指導計画と連動させ、学校・家庭・事業所で共通のステップに取り組めるよう、担当者会議等を通じた情報交換をさらに深化させる。</li> </ul>
<p>作業療法士・保育士や児童指導員に加え、独自の療育プログラム（運動・学習支援など）に精通したスタッフを配置し、多角的なアプローチが可能である。</p>	<p>特定のスタッフだけが質の高い支援を行うのではなく、チーム全体で専門性を共有する工夫をしています。独自の運動プログラムや学習メソッドについて、専門スタッフが講師となって内部研修を実施し、指導のポイントを言語化・マニュアル化することで、どのスタッフが担当しても一定以上の専門的なアプローチができる体制を整えています。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>作業療法の知見をさらに取り入れ、感覚統合やコミュニケーション支援の質を向上させる。</li> <li>達成感を主観的なものに留めず、客観的な数値や頻度で評価・記録し、次期計画へより精度高く反映させるため出来るだけ定量化する仕組みを強化する。</li> </ul>
<p>保護者との関係性が安定しており、相談しやすい雰囲気がある。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>保護者への活動報告に写真を取り入れるなど、透明性の高い運営を行っている。</li> <li>保護者さまに児童の様子をサービス提供記録やhug連絡で詳細におつたえしている。</li> <li>何かトラブルがあった際は即時対応し保護者さまに誠意をもってお伝えをしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>教室と個別の関係性に加え、保護者同士が悩みを共有できる場や、専門知識を学ぶワークショップ（ペアレント・トレーニングの要素など）を企画し、ピアサポートの側面を強化する。</li> <li>保護者向け アンケートを実施し要望や評価を速やかに集計し、具体的な改善策を事業所内に掲示・報告することで、運営の透明性をさらに高める。</li> </ul>

弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	拠点として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取り組みや工夫が必要な点等
<p>経験年数の長いスタッフと新人スタッフの間で、対応の統一感や専門知識に差が生じることがある。</p>	<p>現場での「見よう見まね」に終始しており、放課後等デイサービスの基本理念や専門的な療育手法を学ぶ時間が十分に確保できていない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・内部研修の内容を深めるため毎月の事例検討会を定例化し、ベテランのノウハウや成功事例をマニュアル化して共有する仕組みを強化する。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・静かな場所で集中したい子と、元気に体を動かしたい子が同時に過ごす際のゾーニングに限界がある。</li> <li>・バリアフリー、ユニバーサルデザイン環境の不足。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・近隣に大規模マンションが多く、利用希望者のニーズが「学習支援」「運動」「余暇」と多岐にわたり、全てに応えるためのリソース確保が課題。</li> <li>・テナントビルや利用している為、入り口のスロープ設置、ドアの有効開口幅の確保、トイレの拡充（車椅子対応等）といった大規模な改修が物理的・コスト的に困難である。</li> <li>・段差などの物理的なバリアだけでなく、照明の明るさ、視覚情報の多さ（掲示物の乱立）、音の響きなど、感覚過敏を持つ子どもにとっての「感覚的なバリア」を解消しきれていない。</li> <li>・肢体不自由児と知的・発達障がい児、それぞれの安全確保を両立させるためのレイアウトがされていない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・壁のクッション防音材の活用により、限られたスペースの中で個別のクールダウンコーナーや集中スペースをより効果的に確保する。</li> <li>・地域資源を最大限に活用し、体育館や広い空間スペースでのアクティブに行える活動機会を設ける。</li> <li>・段差がある箇所には、視認性の高いスベリ止めテープを貼る、ポータブルスロープを常備するなど、現状設備で可能な安全対策を徹底する。</li> </ul>
<p>感染に関する危機管理が不足している。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日常的な消毒や換気、検温などの基本動作が形骸化している可能性がある。</li> <li>・最新の感染症動向（インフルエンザ、ノロウイルス、RSウイルス等）に応じた、時期別の注意喚起や対策の見直しが後手に回るなど情報の更新不足。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・感染症対策の責任者を明確にし、毎日の清掃・消毒箇所をリスト化して、ダブルチェックを行う仕組みを作る。</li> <li>・園内・校内での感染症発生状況を迅速に共有してもらうための保護者との連携を整備し、事業所内での蔓延を未然に防ぐ水際対策を強化する。</li> <li>・必要な物品が常に即座に使える状態でストックされているか、期限切れはないかを月次で確認する。</li> </ul>